

第44回(2012年度)サントリー音楽賞は 藤村実穂子氏に決定

公益財団法人サントリー芸術財団(代表理事・堤剛、鳥井信吾)は、わが国の洋楽の発展にもっとも顕著な業績をあげた個人または団体に贈る「サントリー音楽賞」の第44回(2012年度)受賞者を藤村実穂子(ふじむら みほこ)氏に決定しました。

●選考経過

1. 2013年1月14日(月・祝)東京・丸の内の東京會館において、選考委員8名により第一次選考を行い、候補者を選定した。
2. 引き続き3月12日(火)東京・丸の内の東京會館において最終選考会を開催、選考委員8名により慎重な審議の結果、第44回(2012年度)サントリー音楽賞受賞者に藤村実穂子氏が選定され、3月18日(月)理事会において正式に決定された。

●賞金は700万円。

●贈賞理由は別紙のとおり。

●選考委員は下記の8氏。

礒山 雅・伊東信宏・岡田暁生・岡部真一郎・白石美雪
檜崎洋子・沼野雄司・三宅幸夫

(敬称略・50音順)

＜贈賞理由＞

2002年のドイツ・バイロイト音楽祭デビューこのかた、メゾソプラノ藤村実穂子氏の演奏活動は欧米のクラシック音楽界において欠かせない存在となった。そのつねに安定した歌唱、とりわけドイツ語の的確なディクシオンは、ヨーロッパの批評家も脱帽する域に達している。

藤村氏の演奏活動は当該年度（2012年）においても、パリ・シャンゼリゼ劇場におけるワーグナー《パルジファル》のクンドリ役（3月）、ロンドン・コヴェントガーデン歌劇場における同《神々の黄昏》のヴァルトラウテ役（10月）など、その活躍はとどまるところを知らない。

それに加えて、当該年度の日本における演奏活動では、とりわけドイツリートにおける成果が目覚ましい。シューベルト、マーラー、ヴォルフ、R・シュトラウスの歌曲を取り上げたリサイタル（11月、フィリアホール、紀尾井ホール）もさることながら、マーラー《大地の歌》（11月、いずみホール、室内合奏版）が、その白眉と言ってよいだろう。〈告別〉の長く尾を引く惜別の念ばかりでなく、〈美について〉におけるヨーロッパ19世紀末特有の、過去に向けた（そして同時に未来へと回路が通じる）長いまなざしの表現は、けだし秀逸であった。またマリス・ヤンソンス指揮バイエルン放送交響楽団来日公演のベートーヴェン《交響曲第9番》では、高度なアンサンブル能力をも示している。

上記の理由により、藤村実穂子の演奏活動を讃えて「第44回（2012年度）サントリー音楽賞」を贈賞する。

<略 歴>

藤村実穂子（ふじむら・みほこ） 声楽

東京芸術大学音楽学部声楽科卒業、同大学院修了、ミュンヘン音楽大学大学院留学中にワーグナー・コンクール(バイロイト)で事実上の優勝、マリア・カナルス・コンクール優勝など数々の国際コンクールに入賞。2002年日本人として初めて主役級でバイロイト音楽祭デビューし、「スターが誕生した」などの賞賛を浴びた。以来、9年連続全て主役級で出演。これまでにミラノ・スカラ座、ウィーン国立歌劇場、ロイヤル・オペラ・ハウス・ロンドン、バイエルン州立歌劇場、フィレンツェ五月音楽祭、ベルリン・ドイツ・オペラ、ルツェルン音楽祭、ナポリ・サン・カルロ劇場、ヴェローナ、新国立劇場などに登場。またクリスティアン・ティーレマン、クラウディオ・アバド、ベルナルト・ハイティンク、ズービン・メータ、クリストフ・エッシェンバッハ、コリン・デイヴィス、クルト・マズア、マリス・ヤンソンス、シャルル・デュトワ、リッカルド・シャイー、またウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管、バイエルン放送響、ロンドン・フィル、ローマ聖チェチーリア音楽院管、ロンドン響、パリ管、ミュンヘン・フィル、フィラデルフィア管、ワシントン・ナショナル響、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管などから指名を受けて幅広いレパートリーで共演を続け、欧米で「現代最高のメゾ」の名を得ている。

以 上

(ご参考)

サントリー音楽賞について

公益財団法人 サントリー芸術財団では、1969年の設立以来、わが国における洋楽の振興を目的として、毎年、その前年度においてわが国の洋楽文化の発展にもっとも顕著な功績のあった個人又は団体を顕彰し、「サントリー音楽賞」(旧名・鳥井音楽賞)を贈呈しています。賞金は700万円。

これまでに「サントリー音楽賞」を受賞した方々は下記の通りです。

第1回	1969年度	小林 道夫 (ピアノ・チェンバロ・指揮)
第2回	1970年度	堤 剛 (チェロ)
第3回	1971年度	三谷 礼二 (オペラ演出)
第4回	1972年度	小川 昂 (理論・評論)
第5回	1973年度	ICUオルガン委員会 (国際基督教大学)
第6回	1974年度	秋山 和慶 (指揮)
第7回	1975年度	栗林 義信 (声楽) 山根 銀二 (評論)
第8回	1976年度	芥川 也寸志と新交響楽団
第9回	1977年度	常森 寿子 (声楽)
第10回	1978年度	松村 禎三 (作曲)
第11回	1979年度	吉原 すみれ (打楽器)
第12回	1980年度	妹尾 河童 (舞台美術)
	特別賞	江戸 英雄 (第1回日本国際音楽コンクール会長)
第13回	1981年度	柴田 南雄 (作曲)
第14回	1982年度	外山 雄三 (指揮)
	特別賞	原 清 (ザ・シンフォニーホール建設グループ代表)
第15回	1983年度	鈴木 敬介 (オペラ演出)
第16回	1984年度	豊田喜代美 (声楽)
第17回	1985年度	日本テレマン協会 (室内管弦楽団・合唱団)
第18回	1986年度	内田 光子 (ピアノ) 若杉 弘 (指揮)
第19回	1987年度	岩城 宏之 (指揮)
第20回	1988年度	林 康子 (声楽)

第21回	1989年度	有田 正広 (古楽演奏)
第22回	1990年度	武満 徹 (作曲)
第23回	1991年度	尾高 忠明 (指揮)
第24回	1992年度	練木 繁夫 (ピアノ)
第25回	1993年度	五嶋みどり (ヴァイオリン)
	特別賞	ウォルフガング・サヴァリッシュ (指揮)
第26回	1994年度	和波 孝禧 (ヴァイオリン)
第27回	1995年度	今井 信子 (ヴィオラ)
第28回	1996年度	園田 高弘 (ピアノ)
		湯浅 譲二 (作曲)
第29回	1997年度	東京交響楽団
第30回	1998年度	林 光 (作曲)
第31回	1999年度	三善 晃 (作曲)
第32回	2000年度	飯守泰次郎 (指揮)
第33回	2001年度	一柳 慧 (作曲)
第34回	2002年度	小澤 征爾 (指揮)
		木村かをり (ピアノ)
第35回	2003年度	野平 一郎 (作曲、ピアノ)
第36回	2004年度	西村 朗 (作曲)
第37回	2005年度	鈴木 秀美 (チェロ・指揮)
第38回	2006年度	東京混声合唱団
第39回	2007年度	細川 俊夫 (作曲)
第40回	2008年度	小山 由美 (声楽)
第41回	2009年度	大野 和士 (指揮)
第42回	2010年度	渡邊 順生 (チェンバロ)
第43回	2011年度	該当者なし
特別贈賞	1979年6月	巖本真理弦楽四重奏団
”	1997年8月	黛 敏郎 (作曲)

以 上